

■設問8・9に係る分析■

1 分析の目的

本分析は、「悩みやいじめに関するアンケート調査」のうち、設問8「もしいじめを受けた時に、安心して相談できるのはだれですか。」及び設問9「『だれにも相談しない』と回答した人に聞きます。その理由を選んでください。」の回答結果について、校種別（小学校低学年・小学校高学年・中学校・高等学校）および学年別の内訳を基に実施する。

児童生徒が「安心して相談できる」と感じている相談相手の傾向や、相談を躊躇する背景にある心理的要因を把握し、分析することで、児童生徒の理解を一層深め、児童生徒の成長段階や人間関係等を踏まえた相談体制の充実を図るとともに、いじめの問題の早期発見、対処、および児童生徒が適切に周囲に助けを求める能力を養う取組に資することを目的とする。

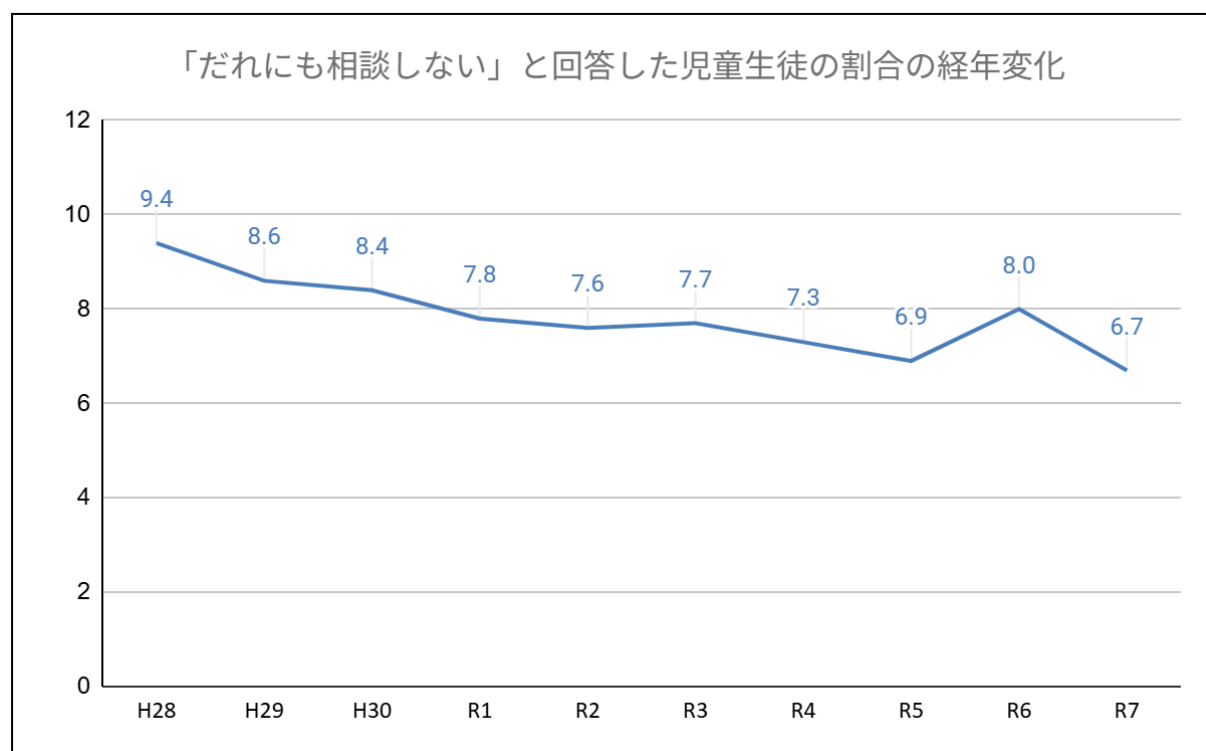
2 設問8について

【設問8】

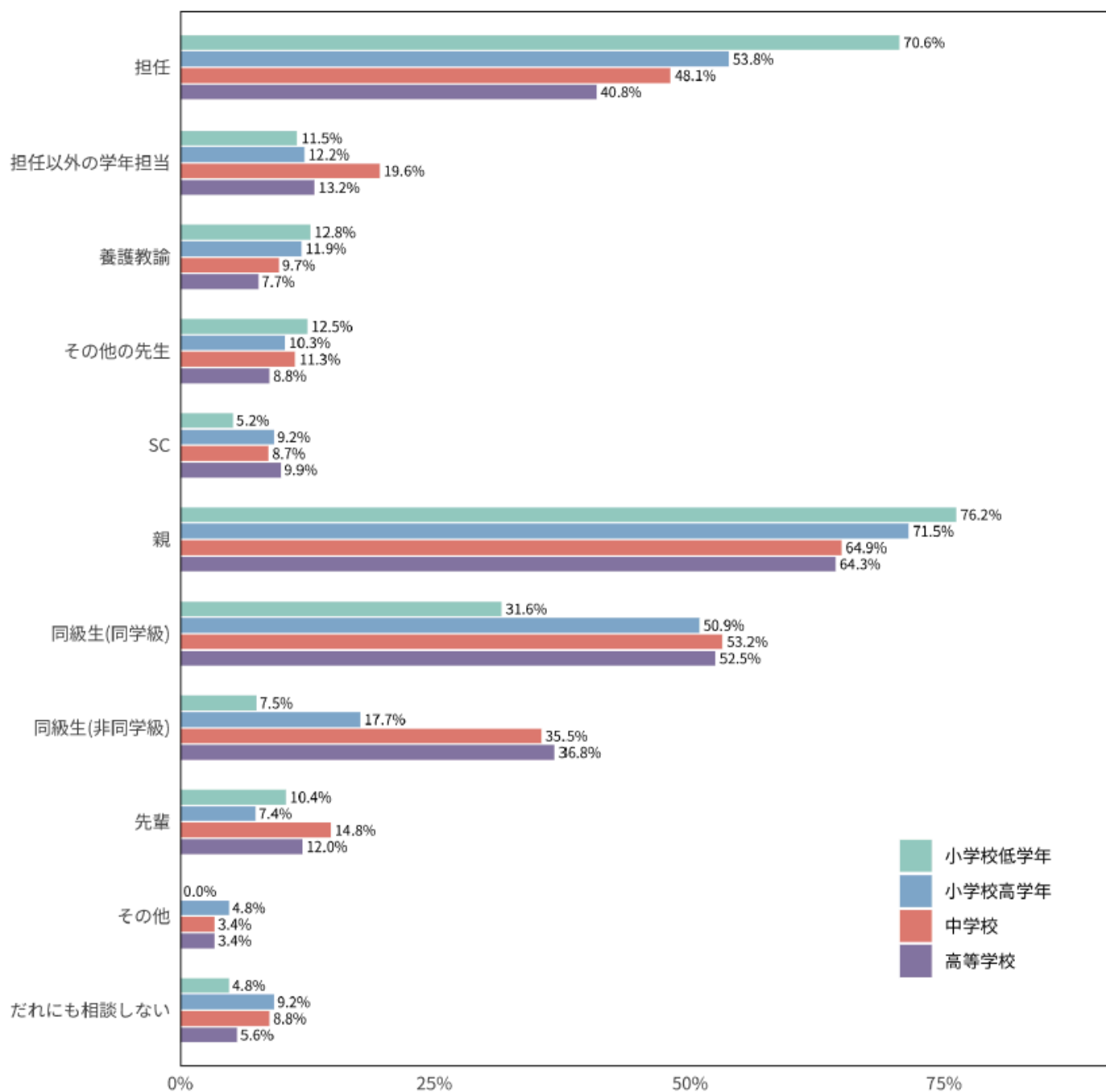
もしいじめを受けた時に、安心して相談できるのはだれですか。

ア 担任 イ 担任以外の学年担当 ウ 養護教諭 エ その他の先生 オ SC
カ 親 キ 同級生(同学級) ク 同級生(非同学級) ケ 先輩 コ その他
サ 誰にも相談しない

【設問8の回答結果】



●児童生徒の校種別回答割合



【設問8の回答結果の分析】

- ・「誰にも相談しない」と回答した割合は、平成28年度から令和7年度に至るまで減少傾向にある。これは、「心の健康観察アプリ」の導入等より、多様な相談先の存在が周知されてきたことも一因として考えられる。
- ・すべての校種において、「親」と回答した割合が最も高く、小学校低学年で76.2%、高学年で71.5%、中学校で64.9%、高等学校で64.3%を占めている。

学年別に見てもすべての学年で最も高く、どの成長段階においても、多くの児童生徒にとって「親」が安心して相談できる存在であることが分かる。

- ・「担任」と回答した割合は、小学校1年生（75.2%）、2年生（71.4%）、3年生（65.4%）と、他の学年と比べて小学校低学年が高い。小学校高学年（50.3%～57.6%）、中学校（45.8%～49.8%）、高等学校（39.5%～42.4%）と学年が上がるにつれて、回答割合は緩やかに減少するものの、40%以上の高い回答割合となっている。また、中学生以上の学年では「担任以外の学年担当」が2割前後（中学校3年で22.0%、高校3年で15.0%）の割合となっており、生徒の成長に伴って、相談しやすい教職員の選択肢が担任以外にも広がっている傾向が見られる。
- ・「同級生（同学級）」と回答した割合は、小学校低学年の31.6%から高学年では50.9%へと約20%近く増加し、中学校・高等学校でも50%を超えるなど、「親」に次いで高い。更に、学級外の友人である「同級生（非同学級）」についても、中学校（35.5%）や高等学校（36.8%）では30%以上の高い割合となっている。これは、児童生徒の行動範囲が広がり、学級内外を問わず人間関係がつくられるようになったことに伴い、身近な友人関係が一層、児童生徒の心理的な支えとして大きな役割を果たすようになってきていると捉えられる。
- ・スクールカウンセラー（SC）については、小学校高学年で9.2%、中学校で8.7%、高等学校で9.9%、回答がなされており、スクールカウンセラーを相談先として選ぶ児童生徒が一定程度いることが分かった。1人1台端末の「心の健康観察アプリ」の「相談ボタン」の活用等により、スクールカウンセラーが学校の相談窓口としてより一層認知されるようにしていく。

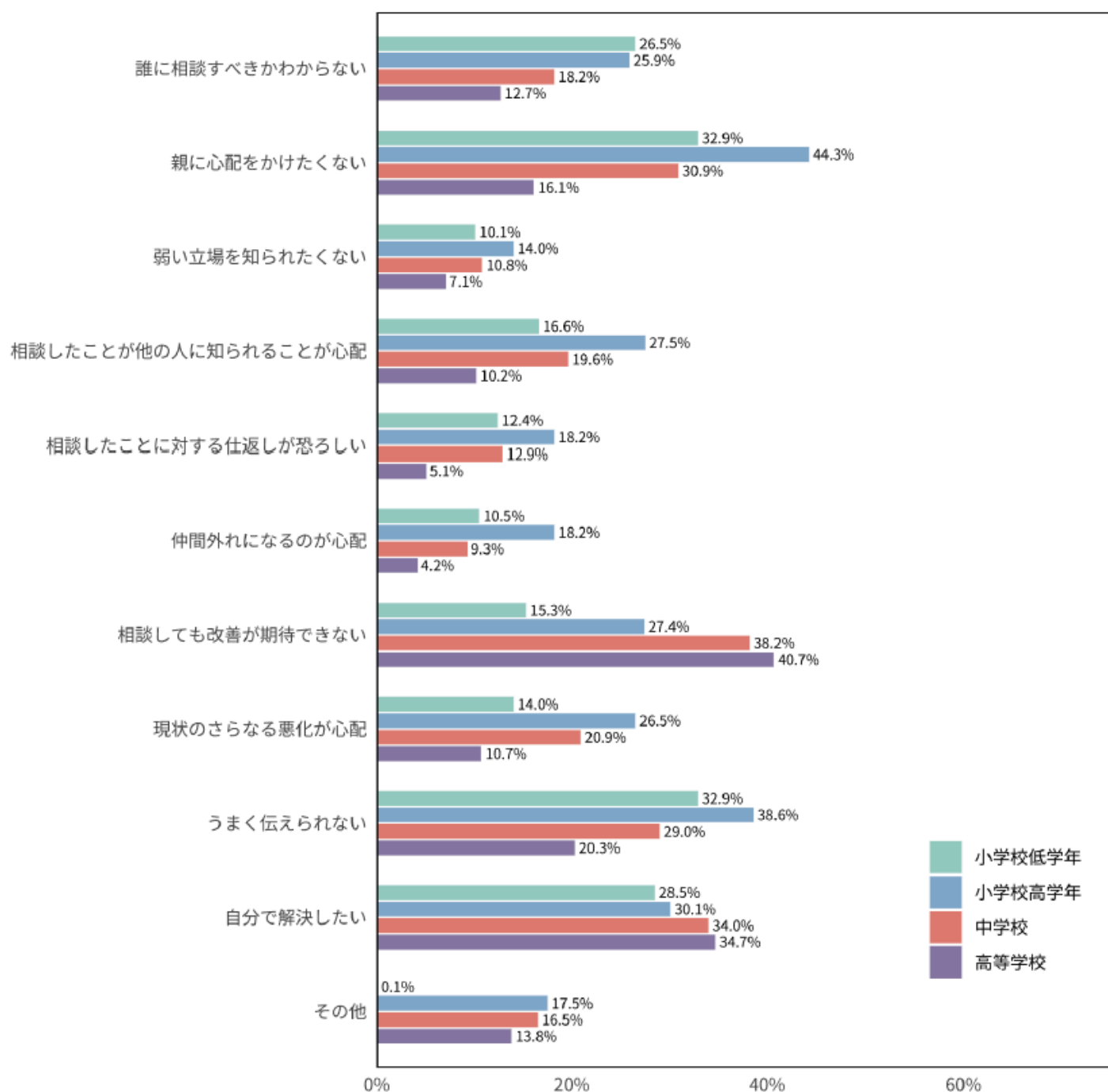
3 設問9について

【設問9】

「だれにも相談しない」と回答した人に聞きます。その理由を選んでください。

- ア 誰に相談すべきかわからない イ 親に心配をかけたくない
ウ 弱い立場を知られたくない
エ 相談したことが他の人に知られることが心配
オ 相談したことに対する仕返しが恐ろしい
カ 仲間外れになるのが心配 キ 相談しても改善が期待できない
ク 現状のさらなる悪化が心配 ケ うまく伝えられない
コ 自分で解決したい サ その他

●児童生徒の校種別回答割合



【設問9の回答結果の分析】

- ・「相談しても改善が期待できない」と回答した割合は、小学校低学年（15.3%）から小学校高学年（27.4%）、そして中学校（38.2%）へと上昇している傾向が見られ、高等学校では40.7%と最も高い。また、学年別に見ても高校3年生では42.7%に達し、最も高い。「改善が期待できない」という意識を払拭するためには、相談を受けた際には迅速かつ組織的に対応し、いじめの解消に至るまで徹底して見守る必要がある。児童生徒に「相談して状況が良くなった」という実感を残すことが、次のSOSを出す安心感につながる。
- ・「親に心配をかけたくない」の回答割合は、小学校高学年で44.3%と最も高く、中学校においても30.9%だった。「親に心配をかけたくない」と抱え込む児童生徒に対しては、相談窓口周知カードの活用等を通じて、家族や担任といった身近な関係性だけでなく、スクールカウンセラーや外部の専門機関など、「まず自分の気持ちを聴いてもらえる場所」が多数あることを丁寧に伝えていく。
- ・「うまく伝えられない」と回答した割合は、小学校高学年（38.6%）、小学校低学年（32.9%）で特に高い。「誰に相談すべきかわからない」についても、小学校低学年（26.5%）、小学校高学年（25.9%）の回答割合は高く、およそ4人に1人が回答している。相談体制の充実に向けては、自身の思いや考えを言語化したり、自身の状況を把握して誰に頼ればよいかを判断したりする経験や能力が十分ではない児童生徒がいることを前提とし、それを理解した上で体制を整える必要がある。「うまく伝えられない」「誰に相談すべきかわからない」小学生に対しては、言葉で説明できなくても意思表示ができる1人1台端末の「心の健康観察アプリ」の相談ボタンの活用をさらに推進するとともに、日常の些細な表情や行動の変化、心身の不調を教職員が敏感に捉え、大人側から積極的に声を掛ける関わりを一層重視する。
- ・「自分で解決したい」という回答割合は、どの校種においても約3割（28.5%～34.7%）となっている。特に高校3年生では37.9%に達し、全ての校種で最も高い。自立心の現れとして尊重すべき側面もあるが、いじめのような個人の力だけでは解決が困難な問題に直面した際にも、SOSを出すのを躊躇している可能性もある。「自分で解決したい」と考える子どもたちに対して、他者に頼ることやSOSを出すことは、決して弱さや恥ずかしいことではなく、視野を広げて自分を守るための大切な力であることを、日頃の道德教育や学活、ピア・サポート等の指導の中で伝えていく。

教師との関係性および接触頻度がいじめ・不登校傾向に与える影響分析

学校で先生とよく話し、信頼関係ができている子どもほど、いじめの被害にあいにくく、困ったときもすぐに相談できていることが分かりました。

1. 教師との関係性および接触頻度がいじめに与える影響分析

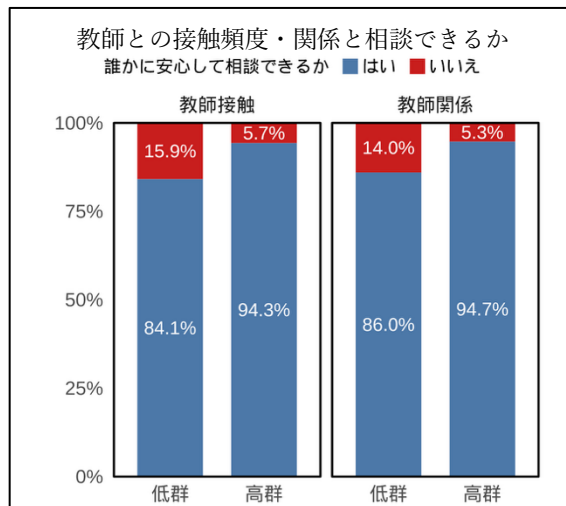
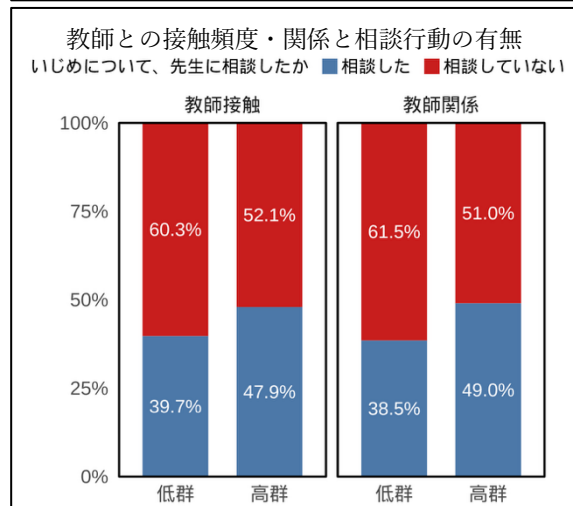
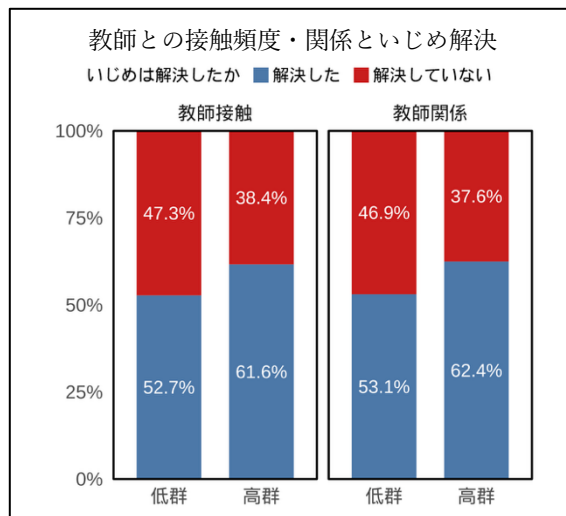
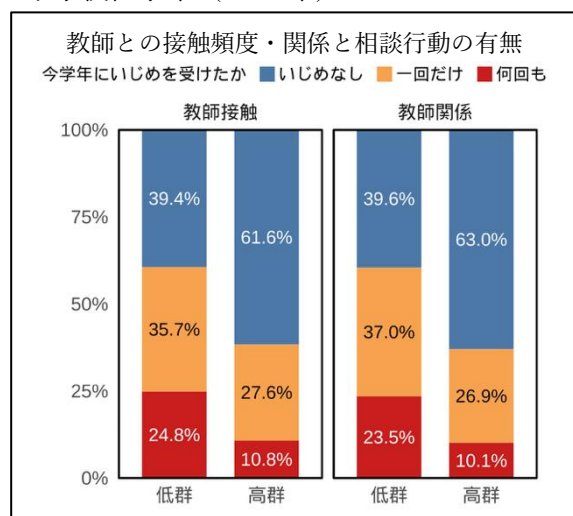
1-1 小学校低学年における分析結果

教師との日常的な接触と良好な信頼関係がいじめの発生を減らし、早期解決を促す（小1～3）

小学校低学年（1～3年生）の分析では、先生と接する頻度の高さと信頼関係の深さの双方が、いじめの抑制と早期解決の鍵であることが、データ上の明確な差として認められました。具体的には、先生との関わりが「量・質」とともに十分な児童ほどいじめの発生が抑えられ、特に深刻な「何度も発生するいじめ」の割合は半分以下（関わりが少ない群の2倍以上の差）に減少しています。

また、良好な関わりがある児童はいじめ解決率が62%に達する一方で、関わりが少ない群では53%にとどまっており、相談行動や意欲についても同様の顕著な差が確認されました。結論として、日々の細やかな声掛け（接触）と、先生を信頼できる環境（関係性）の両輪を整えることが、児童のSOSを早期に捉え、いじめの迅速な解決を促すための不可欠な基盤となります。

<小学校低学年（1～3年）>



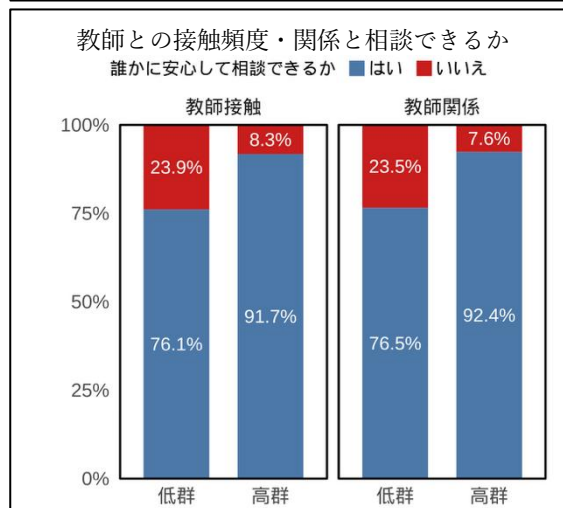
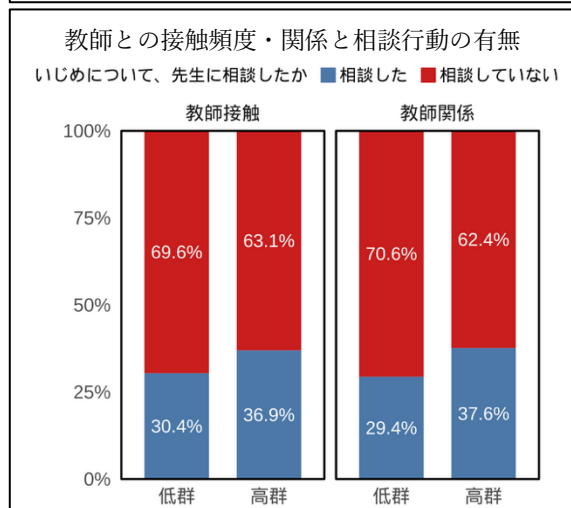
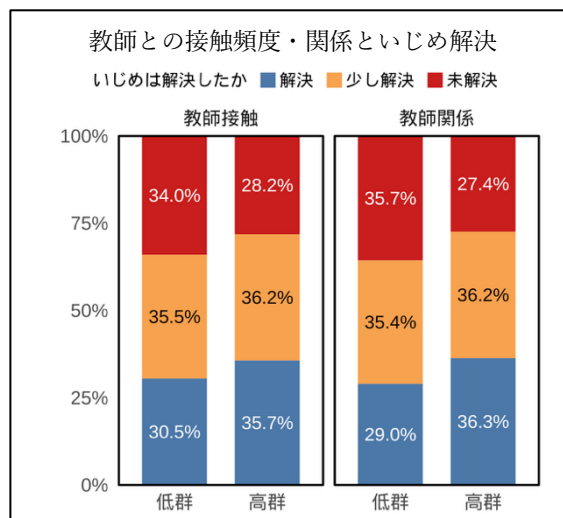
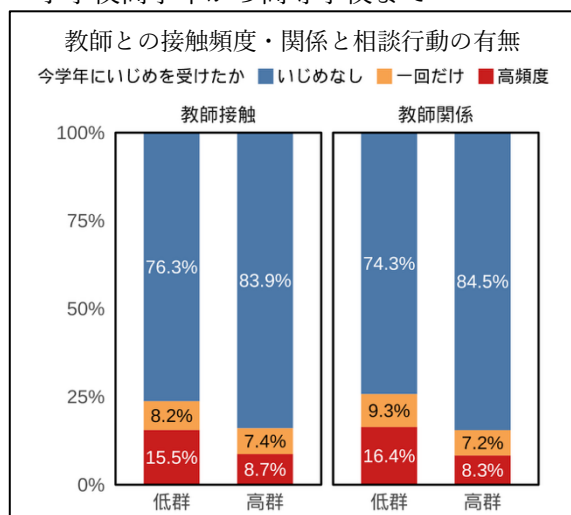
※棒グラフ下記の「低群」はシャボテンログ上で「握手アラートあり」（設問11-①②で低スコア）群、「高群」は「握手アラートなし」（設問11-①②で高スコア）群を意味する。

1-2 小学校高学年から高校における分析結果

教師との日々の接触と信頼関係の構築が、深刻ないじめの解決と相談行動を促す（小4―高）

小学校高学年から高校にかけては、いじめの内容がより高頻度かつ深刻化する傾向にあります。その解決の鍵は教師との関わりの「量と質」にあります。いじめの発生率における差は低学年ほど顕著ではありませんが、解決状況や相談意欲には統計的に明確な差が認められました。特に教師との信頼関係が希薄な群では、良好な群に比べて「相談できない」と回答する割合がほぼ3倍に達しています。結論として、日々の接触を通じて心理的距離を縮め、確かな信頼を築くことが、生徒のSOSを早期に捉え、迅速ないじめ解決を促すための不可欠な基盤となります。

<小学校高学年から高等学校まで>



※棒グラフ下記の「低群」はシャボテンログ上で「握手アラートあり」（設問11-①②で低スコア）群、「高群」は「握手アラートなし」設問11-①②で高スコア）群を意味する。

1-3 分析のまとめと示唆

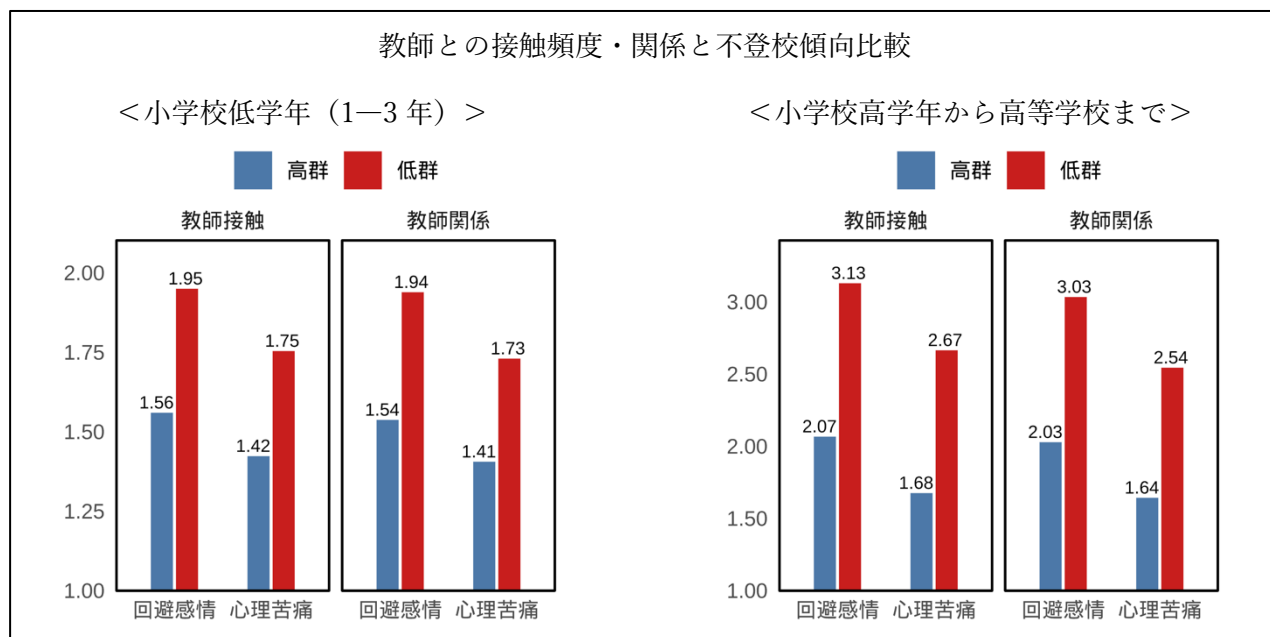
今回の分析では、教師との接触頻度（量）と信頼関係（質）の双方がいじめ対策に重要であることが、明確な差として認められました。

教師との関わりが薄いほど深刻ないじめのリスクが高まる一方、良好な関係にある生徒でも被害は発生しており、全児童生徒への注視が欠かせません。特に小学校高学年以降では、接触回数以上に「関係の良さ」が解決率や相談意欲をより強く促す傾向が示されました。結論として、日々の丁寧な関わりで心理的距離を縮め、確かな信頼を築くことが、SOSを早期に捉え、迅速な解決を導くための不可欠な基盤となります。

2. 教師との関係性および接触頻度が不登校傾向に与える影響分析

教師との積極的な関わりが不登校リスクを低減し、安心感のある学校生活を促す

不登校傾向についても、すべての校種で統計的に明確な差が認められました。教師との接触頻度や関係性のいずれかが不足している群では、学校を避けようとする「回避感情」や、不安・孤独感といった「心理的苦痛」のスコアが高く、不登校のリスクが高まることが示されています。具体的には、教師との関わりが不足している群では、学校に対して「行きたくない」と感じる回避感情や、精神的なストレスである心理的苦痛を抱える割合が高くなっており、不登校に繋がるリスクが示されています。結論として、教師が日々の細やかな声掛け（接触）を欠かさず、生徒が「ここは自分の居場所だ」と思える信頼関係（関係性）を築くことが、心のストレスを和らげ、不登校の未然防止を促すための鍵となります。



※上記グラフの赤棒グラフ「低群」はシャボテンログ上で「握手アラートあり」（設問 11-①②で低スコア）群、青棒グラフ「高群」は「握手アラートなし」設問 11-①②で高スコア）群を意味する。

※以下の数値は設問 11-⑤～11-⑧のスコア平均を表している。

・回避感情（設問 11-⑤⑥）：学校に対して「行きたくない」「学校のことを考えると憂鬱になる」といった、登校を避けようとする心理的な拒絶感を意味する。

・心理苦痛（設問 11-⑦⑧）：学校生活に関連して感じる不安、イライラ、孤独感など、精神的なストレスや苦しみの度合いを意味する。